

2月12日、キューバの首都ハバナの空港の一室で、ローマ法王はロシア正教のパトリアルカ（総主教）と対面した。法王とパトリアルカが会談するのは、1054年に教義解釈の違いから袂を分けて以来、約千年振りのことであった。会談は予定通り2時間だけだった。というのは、ローマ法王はメキシコへの司牧の旅の途中であったからだ。パトリアルカはこの会談のためにモスクワからやって来た。今回の会談のプログラムは極秘のうちに進められていたが、最大の功労者は、ロシア大統領プーチンの援護を受けたキューバの首相ラウル・カストロである。2時間の短い会談では（通訳時間を入れて）、大した話し合いも出来ず、顔見せ程度で終わったことだろう。これからの数多くの対話を通して、カソリックとロシア正教との距離も縮まって行くことに期待したい。今回の出会いを通して、中東をはじめとして、世界各地で迫害を受けるキリスト教徒を擁護することが強調されたほか、事実婚や、父性、母性の役割についての見解も示された。

カソリックとロシア正教の隔たり

カソリックとロシア正教の組織的、あるいは信条に関する相違について確認すれば、次のように整理できるだろう。

〈組織〉

カソリックの信者数：10億2千5百40万人（全世界に分布）
ロシア正教の信者数：2億5千万人（東ヨーロッパ、中東に分布）
カソリックの教会数：1（唯一信条を発するローマ・サンピエトロ教会）
ロシア正教の教会数：17

〈信条〉

・結婚について

カソリック：唯一絶対的、永遠性

ロシア正教：1回だが、離婚の責任者でない者は、2回目以降も教会で祝福を受ける事ができる

・法王、パトリアルカについて

カソリック：法王は宗教的にも法的にも唯一絶対的存在で不可謬

ロシア正教：名譽的立場で法的立場はない

・聖母マリアに関するドグマ

カソリック：処女懐妊、天国に昇天をドグマ化

ロシア正教：聖母マリアに関するドグマはない

2月12日の対面後、法王フランチェスコは、その歴史的な会談を評価して次のように語っている。

我々はやっと会うことが出来た。我々はきょうだいだ。今日のことは神の願いなのだ。今日は恩寵の日だ。キリリ・パトリアルカとの会合は神の贈物なのだ。

また、パトリアルカ・キリリは、今後の会談も示唆しながら、次のように語っている。

我々の会合は全く意見が一致したわけではないけれども、これからも対話する可能性は大いにある。このことは美しいことである。

今回の会談にいたるまで

ロシア正教のパトリアルカに会いたいという希望は、先々代の法王ヨハネ・パオロ2世（1978年～2005年）の時代からあった。しかし、ロシア正教のパトリアルカは慎重な立場をとり、誤りを恐れ、足を一歩前に踏み出すことをしなかった。特に、1991年の旧ソ連の崩壊後、カソリックの宣伝熱を警戒して、両者の会談への動きは下火になっていった。法王ヨハネ・パオロ2世と当時のパトリアルカ・アレッシオ2世との会談については、第一候補地がハンガリー、第二候補地はオーストリアというところまで決まっていたが、結局中止となってしまった。その後、サンクトペテルベルクの若きキリリ神父は、ローマ法王との面会を志したが、結局、時期尚早ということでそれも立ち消えとなっていた。

2012年、イタリアの当時の首相マリオ・モンティはモスクワを訪問した。その時に、パトリアルカ・キリリとも会えるように手配してもらい、ローマ時代の皇帝コンスタンティヌスが313年にミラノの勅令を発してから、翌年で1700年になることを記念して、ミラノに来て、当時の法王ベネディクト16世と会うように進言した。その時パトリアルカは賛意を表明したようで、モスクワでモンティを昼食に招待している。しかし、この時はローマの方が躊躇したようだ。ヴァチカンの内部に色々問題があったし、さらに2013年2月11日に法王は突然辞意を表明した。そのために、会談の話はないものとして流れてしまったのだ。そして、今回の会談のために企画がなされた。隠密行動を取ったのは、カソリック側では、法王の信任厚い83歳の教義聖省長官ワルテル・ガスパーだった。ガスパーは今回の出会いについては「世界の平和と危機についての話し合いであり、キリスト教の統一についてはではない」と定義していた。

ロシア正教のフォロコムラスクは、今回の出会いについて、「今日の出会いはこれからの長い両者の道のりを教えている。問題として残るのはウクライナにおけるギリシャ系のカソリック問題だ。というのは、今回の出会いについても、その代表大司教は否定的であり、反対者だった。しかし、カソリックとロシア正教は小異を忘れ、きょうだいとして一緒に行動しなければならない。今のところ、互いにロシアやローマを訪問するという話はない。今直ぐ可能なことは、聖ペトロ、聖パオロ、聖ヤコブ等の聖遺物とロシア側から他の聖者の遺物を、一時的に相互に貸し出す」といったことである、とコメントしている。

また、法王は今回の出会いについて次のように述べている。

「橋は永続し、一方を他方と結び、平和を築くための手助けとなるのだ。一方、壁は二者を分け隔てる役割をするが、いずれは崩れ落ちるものだ。」

【訂正】

前回の連載（2016年2月号）の左段14行目、「臨時の聖年が開かれたのは、1933年に法王ピオ11世の時に初めて開かれ、……」というのは誤りで、正しくは「臨時の聖年が開かれたのは、1423年マルティノ5世の時だ。そして1933年にピオ11世が開き、……」でした。訂正してお詫びいたします。